

明治二十五年十一月
才六回文科大学遠足会の記
同窓餘影

K298
Sh26



同窓餘影
文學博士幣原坦

明治二十五年十一月
高濱虛子

第六回文科大學遠足會の記
正岡子規

K
S

K298
Sh 26

題 字 文學博士 幣 原 坦 先生筆



同窓餘影

正岡子規の妙義紀行は、文科大学（今の東京帝大文学部）遠足會の記録中に、とち込めてあつたものである。この記録は、第一回の遠足會、即ち明治廿三年三月の鎌倉行から始まつて、第十一回、即ち廿九年十月の鎌倉行に至つてゐる。私は、第三回の百草園行から之に加はつて、第六回にまで及んだが、この第六回こそは、即ち廿五年十一月の妙義登山で、子規に紀行の執筆を煩はしたものである。今より逆算すると、もはや五十五年前の事になるから、風物の變轉、全く想像の外にある。子規も、當時はまだ世に知られず、殊に妙義紀行は、幹事（齊藤阿具、菊地謙二郎兩君）の委囑によつて、ナグリ書をしたもの、やうであるから、爾僕同志間の放心的諧謔に満ち、文の熟しない處も、そのまゝにさらけ出してある。然し、筆端は奔放自在で、中に挿入した妙義行の圖の如きも、素人離れがしてゐて、なか／＼見のがし難い。

一行のうち、三年生は二十人もあり、（但しこれで殆ど全部）、文章の書ける者も、決して少くはなく、特に漱石などもゐたに拘はらず、やつと十二人より來てゐなかつた二年生の中から、幹事がわざ／＼子規を見出して、之に紀行を書かしたといふのは、一には、子規の文想が、群をぬいてゐたのによることを、知るに足るであらう。然し子規としては、厄介な委囑であつたらうし、又本氣で書い

K298
Sh 26

同窓餘影

正岡子規の妙義紀行は、文科大学（今の東京帝大文学部）遠足會の記録中に、とち込めてあつたものである。この記録は、第一回の遠足會、即ち明治廿三年三月の鎌倉行から始まつて、第十一回、即ち廿九年十月の鎌倉行に至つてゐる。私は、第三回の百草園行から之に加はつて、第六回にまで及んだが、この第六回こそは、即ち廿五年十一月の妙義登山で、子規に紀行の執筆を頼はしたものである。今より逆算すると、もはや五十年前の事になるから、風物の變轉、全く想像の外にある。子規も、當時はまだ世に知られず、殊に妙義紀行は、幹事（齊藤阿具、菊地謙二郎兩君）の委嘱によつて、ナグリ書をしたもの、やうであるから、爾僕同志間の放心的諧謔に満ち、文の熟しない處も、そのまゝにさらけ出してある。然し、筆端は奔放自在で、中に挿入した妙義行の圖の如きも、素人離れがしてゐて、なか／＼見のがし難い。

一行のうち、三年生は二十人もあり、（但しこれで殆ど全部）、文章の書ける者も、決して少くはなく、特に漱石などもゐたに拘はらず、やつと十二人より來てゐなかつた二年生の中から、幹事がわざ／＼子規を見出して、之に紀行を書かしたといふのは、一には、子規の文想が、群をぬいてゐたのによることを、知るに足るであらう。然し子規としては、厄介な委嘱であつたらうし、又本氣で書い

題字

文學博士



たかどうか、疑はしい程であるのに、結末に至つて、「子規子識」と、真面目にサインをしてゐるのは、さすがに子規が、一筋縄で押へられぬ人物であつたことをも洞察せられる。

紀行の後に添へてある名列表を見ると、學長や教授は勿論のこと、學生中にも、後に名を成した人々が多くある。松本文三郎博士の佛典研究に於ける、齊藤阿具、村上直次郎兩博士の南洋史研究に於ける、皆然らざるはない。然し、専門學の研究は、とかくそれ以外の人々にあまり知られない。そこになると、小説や俳句に至つては、萬人皆知己となる傾がある。故に、一代の大文豪として、婦人小兒にまで昵まれたのは、やはり漱石と子規とに止めをさされる所以である。而して、この兩君それ自身に於て、亦切つても切れぬ關係にあつたことは、小宮豊隆氏が、漱石自筆の漢文房總紀行「木屑録」の解説中に書かれた所によつても首肯せられる。曰はく、

若し子規がなかつたなら、漱石は、或は學者としてののみ、その一生を過ごしてゐたのかも知れなかつた。その意味では、漱石と子規との交際は、作家漱石にとつては、殆ど運命的なものであつた。

誠にその通りで、我々も實は、漱石が立派な大學教授として、生涯を送るだらうと期待してゐたのであつたが、一朝豫期に反して、彼が作家として、新聞界に身を投じた時、毀譽褒貶が、一時に同學の間に起つたのも偶然でない。さうして又、小宮氏の言の如く、「子規は、一面なか／＼人に許さない所

を持つてゐながら」、漱石に對しては、常に之を畏友として取扱ひ、「漱石の事を書きさへすれば、殆ど必ず、漱石を畏敬する意味のことを書いてゐる」。これ畢竟、漱石の人格及び知能に於て、他人の企及を許さざる優秀の点を認めたからであらう。

いふまでもなく、漱石は、英文學を以て身を起したのであつたが、まだ大學に入らない前から、既に右のやうな漢文紀行を書いて子規を驚かし、子規も喜んで、その處々に朱書して之をかへした。この漱石自筆の木屑録と、子規自筆の妙義紀行とは、共に旅行記で、さうして、一方は漢文、一方は和文であるから、眞に好一對の雙壁と稱して不可はない。曩に木屑録が、岩波書店から世に公にせられた以上は、今回妙義紀行が、赤城書房から公にせられるのも、亦故ありといはねばならぬ。

大學に於ける學業の成績からいふと、漱石ハ遙に子規を超えてゐた。その一斑は、常に特待生として、優遇せられたのに徴しても伺はれよう。子規は、何分病を持つてゐて、専心勉學が出来なかつたのであるから、成績が擧がらなかつたのも當然であり、遂には、妙義紀行を書いて間もなく、大學を退くの止むを得ざるに至つた。さうして平素、「僕のやうな癡人は、他人の捨て、顧みない事でも、氣任せにやつて、一生を終るより外はない」など、いつてゐたが、獺祭書屋俳話が、「日本」新聞に連載せられてから、頓に人目を恃てしめた。

人物からいふと、雙方共に見識があり、又しつかりもして、何れを上、何れを下とするを得ない。

漱石は江戸ツ子で、品もよく、健康保持の爲めに、毎日遠方から、制服に身を固めて大學に通つた。子規は多言をせず、出席率もよくなかつたのは、病身の免れない所であるが、句に現はれる力は、新味勁調に富んでゐた。或時、街頭の書店に、子規の

潮干潟となりの國につゞきけり
と、漱石の

釣鐘のうなるばかりに野分かな

とを二幅對にして、賣出してゐるのを見つけて、購ひ歸つたことがあるが、今又茲に、妙義紀行と木屑録とを机邊に置いて見ると、懐かしい同窓の餘影が、髣髴として昔を語るが如くである。

昭和廿一年六月

幣原坦

明治二十五年十一月

明治二十五年十一月といふと子規は根岸に移つてゐた頃で、一人の婆を傭つて家を持つてゐた。十二月には日本新聞社に入社した。さうすると此頃はもう大學を止めることになつてゐた時であらう。

既に二十五年の夏から日本紙上に投稿してゐて、大學には餘り出なかつたものと想像される。そんなことを子規は話してゐたやうに覺えてゐる。燈火十二月ケといふ俳句を作つたのがもとで、何々十二ヶ月と稱するものを頻りに作り其等のものを私等に示したこともある。又其前年駒込の下宿にゐた時分に「月の都」といふ小説を書いて、露伴を訪ふて批評を乞ふたこともある。既に創作熱が旺盛であつたから、學校の課業には興味が無かつたのであらう。

日本新聞社に入社と極つたのが、九月であつたか、十月であつたか、十一月であつたか、其邊のこととは分らぬが、兎に角此三月の間であつたことは間違ひあるまい。夏歸省して九月に上京してゐる。多分上京して話が極つたものであらう。

一人の婆を傭つて自活を始めたといふ根岸の家は、日本新聞社の社長陸羯南の邸の西側の家であつた。其後陸邸の東側の家に移つた。最近迄保存されてゐた子規庵がそれである。併し今度の戦災で其邊は凡て焼けてしまつた。

私は其頃京都の第三高等中學校に居た。十一月——丁度この妙義に遊んだ月、子規は家族迎への爲め郷里の伊豫の松山に歸るべく、途中京都に立寄つたので、私は共に嵐山に遊んだ。

嵐山の紅葉を觀賞すべく船に乗つて大堰を遡つたが、記憶に残つてをるものは、其景色で無くつて、互に文學談をしたことであつた。子規も意氣軒昂としてゐた。私も同様であつた。

丁度その十一月といふ月に書かれた此の文章を計らずもこゝに見ることが出来たといふことは私に取つてもなつかしいことである。

此の紀行文は子規が幹事であつたから書いたといふのでは無く、幹事にたのまれて書いたものであることは斷り書きに書いてあるが、大學はもう止めるといふので、お名残りの心持もあり、又心のゆとりがあつて書いたものゝやうに見える。

此文章は後年の寫生文と稱へるものゝ如き簡素な叙寫とは違つて、多少の誇張粉飾もある。前時代の文脈を引いたところもある。強いて面白をかしく書いたといふあとが見える。固よりたいして骨を折つて書いたものとは覺えないが、子規文集中に無くて差支無いものである。殊に俳句に至つてはいづれも子規の爲めに抹殺すべきものである。併し子規は明治三十五年に死んでゐる。子規はこの邊から出發して約十年間に俳句、文章共にあれだけの革新を成し遂げたといふことは驚嘆すべきである。さういふ意味に於て「七草集」など、共に斯ういふものも貴重な史料といふべきものかもしれぬ。

子規は輕々しくものをする方では無かつた。餘程慎重に熟慮してかゝる方であつた。學校を中退するといふことも、考へた末のことであらう。其主な原因は病氣であつた。其迄に二三度は咯血したことがある。到底自分は長生きは出來ぬものと覺悟してゐた。さうして子規は功名の念は強よかつた。従つて仕事を急いだ。私等がまあ當分はぶら／＼してもいゝとよく考へることがあるやうなそんな悠長な考へはなかつた。一日も惜しかつた。一時間も惜しかつた。學校にゐて費す一年の日數が惜しかつた。それよりも早く仕事しが度かつた。そんな考への爲めに學校を中退して日本入社のことを決心したものであらう。

陸羯南は子規の叔父加藤拓川の友達であつた。そんなことから子規は羯南に面會したものであらう。はじめ羯南邸の西隣の家に婆を一人傭つて家を持つたといふのも已に羯南の知遇を得てをつたが爲めであらう。それより死ぬるまで羯南の知遇は變らなかつた。子規が瞑目した時も一番に羯南に知らせた。「子規居士」と位牌にも墓にも羯南が筆を採つた。

子規は「日本」にあつて主として俳句を鼓吹してゐたが、後ちに「小日本」といふ「日本」分身の小新聞の編輯をしてをつた。其は長くは續かなかつたが、日清戦争が始まつて同僚は皆從軍記者として大陸に渡つた。子規も脾肉の瘵に堪へなくつて、終戦近くに從軍した。併し間もなく停戦になつて、戦さを見ずして歸つた。さうして大咯血をして癡疾の身となり、爾來病床に在つて俳句、和歌、文章

の爲めに、それを一時間も一分間も休むことなく奮闘を續けた。大學を中退した時の一念は死ぬる迄續いたのである。

子規に取つては重大ともいふべき、其大學中退を決心した明治二十五年十一月といふ月に此の文章が書かれたものであるといふことが特に私をして興味を覚えさせるものである。

赤城書房主人が来て、一綴になつてゐる第一回以來の文科大学遠足會の記事を示した。其人々の名前の中には私の知つてゐる人も相當にあつた。其中には夏目金之助（漱石）の名前もあつた。それ等なつかしい人々が、いづれも二十幾才の青年として活躍してゐる凡ての記事は面白かつた。文章として書かれた子規の記述よりも、なまじい素朴な他の人の記事の方に面白いものがあるかとさへ思はれた。凡てのものを翻刻したならばなかく／＼に面白からうといつたが、主人はそれは出来難いことだと云つた。

主人の言によれば、幣原坦博士は、此子規の文章について、私にも何か書かしたらよからうのとこの言はれたさうである。切角の博士の言と主人の懇望との爲めに、いはでものこゝを認めた次第である。

昭和二十一年六月二十八日

小諸山居にて

高濱 虚子

第六回文科大学遠足會の記

ひねもす硯よ向うて何くれと誓きつくればあやしう心ぐるしきにかくてハ佝僂セムシまやならんとて兩手をあげて伸びをしながら上を仰げば天井の節穴ひし／＼とつらなりたる外ハ何の見處もなし。二六時中坐禪ハあらで机もたれて書讀ミ居ればいつしかに尻こそばゆきにどうやら尻の腐りをめけんやうに覺えて試みに立て部屋の中をありければ足もとよる／＼と本箱に額をつきあてゝしたゝかに痛むめり。我黨の學者文人かゝるかよわさありさまにてハいざ大博士と推し上りし時何の用にも立ちがたからんと一人がいへば二人がいひついで十人が二十人になりはてハ文科大学の遠足會となりて處々方々へ押しかくることとハなりぬ。

達磨殿踊り出したり秋のくれ

明治廿五年十一月五日（土曜日）午後二時大雨を侵して上野停車場迄押し寄する面々の打扮如何に見てあれば、頭にハ大學の紋所うつたる四角の帽子を目深マブカにいたゞき、金釧キンゴウシンド威しの上着、同じく金釧おどしの外套に身をかため、あるハ蝙蝠あるハ捨ツ木思スベひ／＼の得物をりう／＼と打ち振りて進みいでたる有様かひ／＼しくも亦恐ろしかりき。まッたこなたの一手を見れば、高帽タカ低帽ヒク笠形帽カサガタを猪首イブキに着なし布の腹巻、木棉の羽織に惣身をかため足にハ小倉の書生袴を穿つて裾短フスマかに絞りあげ長刀形

の草鞋をふみしめ、蛇の目の傘を眞向に振りかざしたる身輕の打扮あつばれ強の者とぞ見えたりける。

一〇

秋の風帽子の角を吹きへらす

目ざす所ハ上州妙義の紅葉狩、鬼女の一人や二人ハ何かあらん杯と一人がりきめばかなたのもの蔭にて一時雨をいそぐ紅葉狩。深き山路を尋ねん。ト誰やら小聲に歌ひたるいみじうゆかし。いざ瀛車のいでたつにはや乗り給へと車守のいふに皆我先にとつめこんだる事なれば大將も雜兵もあらばこそとくに乗りこんだるハおのが坐をかまへて一步も動かす遅く掛けつけたるハこゝかしこに立往生をぞとげたりける。心なき車守ハ何の用捨もなく笛をヒューと鳴らせバ瀛車ハ心得顔に復ヒューといひたる大方アイヨといふ返事なるべし。根岸金杉ハ瞬く間に過ぎてある時ハ林にそひある時ハ畑を横ぎり進む程に雨またくふりしきれば遠景糶糊として見わけがたく車の窓くもりて拭ふすべもなけれどぼんやり然たる秋色中々に與ありて網をかぶりたる西洋流の美人を見るが如き心地す。

瀛車の窓折々うつる紅葉かふ

淋しさにたへてうつむく案山子哉

武藏野ハ稻刈る秋と成りにけり

いつからを時雨といはん太陽曆

など思ひくりに放吟す。されど面白きものハ大方に忘れれば拙きもの許り書い志すすになん。王子赤羽根浦和ハいつしかに過ぎて大宮にて瀛車を乗りかへ吹上熊谷鴻の巢などいふ處もすみてやうく磯部停車場に來り車を下りし時ハはや日暮れたり。一人二人三人と驛夫に數へられながら五十餘人が車を下れば先發として出張したる菊池謙次郎（立花銃三郎）ハ御出迎へとして場外に待ちあたり。こゝより妙義迄猶歩行路三里ありといふに重野講師ハ一も二もなく甲をぬいで當地の宿屋へと急ぎ給ふ。中嶋教授ハ人車にて行かれ得るやと問ハれたるに路ハさのみあしからずと答へたればさらばとて車夫を召して價を問ひ給ふ。車夫は奇貨居くべしとて若干と答へければ教授驚いて重野講師の後を追ひかけ行かれたり。敵地に入るや否やはや二人の老武者を失ふたれども血氣の若者いかでかためらふべき。三五と群をなして大雨を事ともせず案内者の提灯を目あてに桑畑の闇を辿り行くこをいさましけれ。

團栗二つ闇にまぎれてこぼれけり

半分ハ夜に入る秋の旅路哉

桑の葉ハ虫もくはずに秋くれぬ

二里の道のりを足でさぐりつゝ歩めば雨ハをやみになりてそれかあらぬか妙義の山々ハほのかに見られたり。猶いさみて進む程にいつしかに雨ハまたく晴れて雲の名残のところくあからむ心地すれ

一一

ばかなたの山の上に十六夜の月いとなまめかしく現はれいでたるにありあふ人々見かへりて一齊にあ
と叫ぶ聲さもいさまし。

一一

秋しぐれ 兎角月にハ成り易き
長月ハ十六夜といはで哀れなり

月の光に見れば岬々として正面に聳ゆる山間へでも妙義なりとハさだかに知る。

雨少し月はれて山すさまじき

明日の旅路見つゝ行く夜の長さ哉

誰いふとなくこよひの宿りハはや近つきぬと口々にいへば足の疲れもわすれて躓きながら小ばしり
に走りつきぬ。

下車漫歩雨全休 一路桑田入上州

當面青山行漸近 人登紅葉白雲樓

白雲山下の菱屋を一夜のあまし所と定む。先陣二陣と次第に馳せ集まればあるじの女房はした
めなんどの門にイみて「オ早ウオツキサマ」オ勞レデゴザイマシヤウ「オ早フサマ」オ勞レサマ「オ早
フ」オ勞レ と異口同音にいふ聲引きもきらず。足もそこ／＼に洗ひておの／＼風呂場へ詰めかくれ
ば其混雑大方ならず。此人ごミの中へ一本の棒を入れてかきまぜなば芋の如くにや垢も落ちなんなど

口さかしき人のしやべれば笑ひの聲沸き上りて湯もたぎる心地す。皆と洋服の釦などはづして身を横
さまになし力の限り兩足を踏みのばせば今迄は勞れて短かくなりし足の俄かに二三寸も伸びたる心地
するに「若しかゝるさまにこよひ一夜を寢なバあすハ足長嶋の人にやならんなど例の人の笑ハすめり。

秋しらぬ旅や同行五十人

火鉢を本丸にしてこゝかしこに五人六人づゝ割據し思ひ／＼の才をたゝかハす程に夕餉と、のうた
りと世話役のふれまはるや否や謙退辞讓もあらバこそ坐のよき處坐蒲團の清らなる處菜の多さうな處
へと争うて坐りぬ。膳ひつこめば夜具ハ現はれたり。箸をすつれば枕をかゝへたり。夜具はうつくしき
が少くてゆくりなく争ひなごすめり。よきものを得たるは厠に行くにだにその夜具を小腋にかいこミ
肩にかけなどしたるいみじうおどけて見ゆ。夜具の肩に赤ききぬの縫ひつけたるが多きを一人が恠し
ミてそのわけを問へば他の一人がハ大方に此隣の妓樓よりこそ借り來たるなめれといふ。そハいよ
／＼いぶかしきことなり。此家數三四十軒にてしかも街道にハあらぬ町に色ひさぐ家などのあるハ如
何にと押し返して問へばいやとよ其妓樓も今ハ店を閉ぢたり。されどきのふまでこゝに通ひしものハ
近郷近在のものにて中にハ山一つあなたより夜半にひとりこえくるものも多かりきとぞきくなるなど
こまやかにはなすに笑坪に入るもありあるハきたなし／＼などいひて夜具に睡したるもいとをかし。

長き夜やたがうつり香の薄蒲團

一三

傾城のぬけがらに寝る夜寒かな

などこなたの隅よりうなり出だせハ又かなたの隅に

すさまもる妙義あろしの身にしみて

君がこぬ夜ぞふけまさりける

これハ其頃の傾城の歌なめりとしてクス／＼と笑ひなどするいミじきすきものなりけり。話とだゆれば
軒齒ざしりの音のみ高きに一人が耳を敬て、あやしきかたに軒の聞ゆなりとて行き見れば厠に眠りた
る人こそありけれ。あなむさくろしこなたへなどいひて伴ひ來れるもをかしく

秋の夜や厠に籠る軒あり

といへば傍の人がそハ春の夜ならでハとて笑ふめり。あとハしんとして犬の聲だに聞こえず。人々の
夢も妙義やよづらんとぞ思はる。

あくれば十一月六日朝とくゆり起されて廊下に立ち出で見るに筑波をはじめ上州武州の山々目の下
に見渡さる。己が身はまだ山の麓にありとのみ思ひしも此妙義町ハはや餘程の高さにハありけり。さ
てハ磯部よりこゝまでハ絶えず爪さき上りなりしをよと思ひはからる。朝餉たうべて後あのか／＼草鞋
脚半など着け力杖など探し求めて同勢五十人門口に勢揃へす。けふハきのふに引き加へていとよく晴
れ渡りたれば心よきこといハんかたなく妙義の山も一飛びに飛び上らんとぞひしめきたる。そもく

此妙義の山と申すハ昔より名たゝる靈山にていやしくも身に不淨ある者こゝに上れば鼻高き神につか
まれ八つぎきにして谷底に投げ落すよし申傳へたれば夏に至れば道者など齊戒沐浴して参りけるとな
ん。されど我々五十人のともがらハ皆都にて名たゝる天狗なればいかでか彼等に恐るべき。なるべく
ハ其魔術をこゝろみくらべて彼の鼻を折りてくれんすものをなどのしりあへるに山の神も後生畏る
べしとて舌や巻き給ハん。此山は三つに分れて前なるを白雲山といひ次なるを錦雞山といひ奥なるを
金洞山といふ。そを盡く拜まんにハ四日五日も費すべしといふにけふハ金洞山のみとぞ定まりける。
宿屋を出で進軍すればはや正面に白雲山屹立して其懸崖の高さ幾百丈といふことを知らず。若し此
崖の落ちかゝりなば妙義の一村は押し潰さるべしと思はるにその處々やさしう紅葉したるハいとく
めづらかにもくしき心地なんする。

白雲や三千丈の萬紅葉

左へ曲りて白雲山を右に見つゝ行くにこなたさまも皆大なる巖石より成りて其巖こそいたくふとや
かなれ、山と見るにハ餘り高からずと覺ゆるものから磯部よりこなたの爪さきあがりなる有様を考へ
あハすればまづ下の圖の如きものならんかと思はる。其形湯出鱈ユツゲをふせたやうなりと思へハ紅葉に染
みたるもをかして

鱈置いたやうな山あり秋のくれ

登り行く道の邊に「此園中爆發物あり立ち入るべからず」と記せる札たてたるに恐ろしくをかしくて

紅葉狩鬼すむ方を見つけたり

やう／＼に鳥居のある處に來りてしばし憩ふにはや山の深さを覺えて心地すが／＼しくなりぬ。錦
雞山目の前にありて秋の色うつくしけれ

紅葉せぬいはほも山もなかりけ

稍平らなる岨道に沿うて四五町歩めば路少し開きて社務所の前に出でたり。こゝにて休息す。

菊植る丈の畑あり山のおく

社務所のうしろハ一面に巖削り立てたるが如く玉筍一劍などいふ形容詞もあながちに誇張ならず
狩野流の山水も必ずしも虚構ならずと思はる。旭嶽に昇る。岩といふ岩の間やう／＼爪を横さまにし
て攀づる處などあれハ皆杖をすて鐵鎖をたよりにつたひ上る。上りつめて岩の頂に坐すれば社務所は
幾十丈の下にありて後來る人々蟻のむれに似たり。まことや此岩下を上げて上ふくらかなれハ風の吹
く度にゆらめく心地して強くも強くも得踏まぬ程也。

足もとや眼ちらつく秋の雲

西のかたを見れば信州の山脈波の如く皺の如く疊みかけ／＼したるさま見る目もすさまじく人の住
むべき處だにあらすと見ゆるに

秋の山信濃の國ハさそろしき

再び社務所の前に下りてこゝに寫眞を寫さんといへば皆思ひ／＼の坐を取る。斯波某撮影す。

行く秋やぼんやりしたる影法師

案内者に従ひ行けば數町にして第一石門に至る。只見る數十間の高さなる大窟石をも鑿もて判りた
らんやうに聳えて門の形をなす。潛りぬけて見顧れば遠近の山野の景色石門の中に見透さるゝなどえ
もいはん方なし。

石門に雲乃宿かる紅葉かな

第二石門ハ其穴岩の中央にあれば鎖して上り下りす。一人／＼滑り／＼く／＼り行くにいたく時を費
したり。第三石門ハさのみ大ならず。第四石門も小さくして見所なけれどもこゝより見渡すにそのな
がめまたなく面白し。第二石門、鼓岩などほか／＼とツツ立ちて押せば倒れなんと見るに今をさかり
と紅葉の染め出だせるさま筆にも及ばず。

むら紅葉巖ばかりの深山かな

恐ろしきいはほと見れば紅葉かな

更に上ること二三町体内くゞり、天狗臺、龜岩、蟻のとわたり、などいふ難所空さまにひろがりて
こゝぞ尤高きところと思はるゝに足ふるへ眼くらミてもいふさへ危き心地なり。心たけさハわざと

けハしき岩のはしなどに腰打ちかけて煙草吹かすに下より見あぐるものハあなやとて冷汗流すめり。

岩またぎ岩くゞり紅葉見てありく

ある人赤城榛名ハ如何と問ふに傍なる人「榛名ハ温順に赤城ハ幽邃なり。つひに妙義の到る處奇警斬新なるが如きハあらずとて

榛名春赤城夏妙義を秋の姿かな

など口に任せて吟じてたるいとをかし。妙義の石門を見るハ天井の節穴をながむるよりも面白く白雲斷崖の上に立ちて尻に天風を吹かせたれば最早腐る氣遣ひもあらしなど語りながら下山の途に就く。重野講師中嶋教授後ればせに山を上り來られたるさまいと苦しげなるものからけなげ也。

菱屋に歸りて皆晝餉の膳に就けば例によつて幹事の謝辞、外山學長の挨拶すみて指名點呼行ハる。名を呼べるゝまゝに起立するの法なり。それもすめば餓虎の餌を争ふ如く長鯨の百川を吸ふが如く飲ミ食ひなです。大山行の時とどちらが御馳走があるなどゝうわさとりくゝの頓飯もすミてはや歸り支度なり。菱屋をいで行く事一二里にして願ミれば鋸の齒の如き妙義ハ見えながらいづくより上り得しとも更にわかず

立去ル事一里眉毛に秋の峰寒し

燕 村

といふ句など思ひあハさる。磯部より瀛車に乗りて走る程に日暮れ月現ハれて眺望面白からぬにあら

ねど皆一日の旅に勞れたれば駝句もいでしたと瀛車遅しとのミつぶやかれたる程にはや上野停車場へと着きぬ。此一行天狗に投げられたる者もなくてまづハめでたしく。

行く秋をさらに妙義の山巡り

幹事の清囑によりて

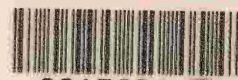
子 規 子 識



群
馬
県
立
図
書
館

K298

群馬県立図書館



0243231-8